

「表現」のとりえかたについて

- 保育学会研究論文集より現状を探る -

吉 森 恵

(姫路学院女子短期大学)

1. はじめに

幼稚園教育要領は平成元年3月に改訂され、今年で施行後9年目を迎えた。従来は領域「音楽リズム」、「絵画制作」というように設定していたが、現要領では子どもの表現を総合的にとらえることになり、領域「表現」となった。改訂後も表現のとりえかたについては、様々な議論がなされてきた。幼稚園教育要領の解説書で黒川は、表現を手段に応じて、音楽、美術、劇、映画、舞踊などの分野にわけられているとしながらも、実際に子どもたちが表現する様子を見ると、必ずしも手段を区別して使い分けていないと述べている¹⁾。確かに子どもは分野を区分して表現するのではないが、保育者の立場からみれば、それぞれの分野から子どもの表現をみることも大切である。例えば、子どもは、楽器のように音の出るものが好きである。友達と合わせるともっと色々な音色を楽しむことができることや、色々な楽器を使うことで、表現が変わることも子ども達にとっては大きな発見となる。

この9年間に「表現」のとりえ方は、教育要領の主旨にあうように変わってきたといえるのだろうか。今回は、改訂以降、日本保育学会で発表された「表現」をテーマとした研究においてどのように「表現」をあつかわれてきたかを調査し、研究の傾向を探ることにした。

2. 方法

第42回(1989年)～50回大会(1997年)の保育学会論文集から、タイトル・副題のどちらかに「表現」という言葉を使用している論文を抽出した。まず、研究対象を2分化し、子どもを対象とした研究を「子ども対象」とし、保育者志望者(学生)と保育者を対象とした研究を「保育者対象」とした。表現については「音楽」、「美術」などのように分野に分けてそのうちの1分野のみに限ってあつまっているものを「単独」、同様に表現分野の中で複数分野をあつまっているものを「複数」、表現を分野に分けず一体化としてとらえているものを「総合的」とした。また、研究内容として実践を伴わない研究を「理論研究」、実践研究を「実践」、質問紙による調査研究を「調査」の3種に分類した。

3. 結果

1989年から1997年の間に「表現」という文字をタイトルに入れている発表数は182件であった。そのうち、子ども対象

の研究は120件(66%)保育者対象の研究は62件(34%)であり、全体では子ども対象の研究の方が多かった。表現のとりえ方別にみると、182件のうち表現を単独分野であつた研究は77件(42%)、複数であつている研究は84件(46%)であり、大きな差はなかった。しかし、総合的にあつているものは21件(12%)と少なかった。また、年度ごとにみても、その割合は大きく変動していないようだった。(図1)。

次に研究内容だが、182件うち理論研究は49件(27%)、実践研究は109件(60%)、調査研究は24件(13%)であった。年度ごとにみると理論研究が減り、調査研究が増える傾向にある。実践研究をみると、子ども対象94件で全体の51%、保育者対象15件で全体の8%と子ども対象が非常に多かった。理論研究と調査研究については両方とも子ども対象より保育者対象が多かった(図2)。

4. 考察

表現を分野に分けず総合的にとらえた研究は少なかった。研究者は子どもの表現を総合的にとらえることは重要だと認識している。しかし、分野に分けてとらえた方が研究の目的を設定しやすく、視点を定めて調査できるからではないだろうか。分野を中心においていてもそこから発展していく方が表現をとらえやすく、研究のテーマとして調査しやすいと感じているのではないだろうか。研究の方法として表現を分野に分けて単独にあつても、それを実際の保育に反映させる時には、総合的にとらえるべきだろう。研究は、あくまでも保育実践に役立つものでなければ意味がない。

単独分野研究と複数分野研究というように分けて違いをみたが差はなかった。これは、単独研究中心であっても表現のそれぞれの分野に関連した部分が必要あり、表現の基本的な部分が切り離せないからではないだろうか。また、表現の関連した共通部分があるのだと研究者が感じているあらわれではないだろうか。

研究調査が増加傾向にあつたのは教育要領改訂後、養成校の学生の「表現」に対するとりえ方や、保育者のとりえかたの変化を再確認しようとしているからだと考えられる。

実践研究は子ども対象が多かった。或は「専門的な研究者の方々にも幼稚園・保育所の日々の生活を知っていただき、その生活を直ちに自分の体で感じられたところから研究を進

めていただきたい」と述べている²⁾。子ども対象の研究が多いのは、研究者や保育者が子どもを理解しようとしているあらわれではないだろうか。

ここ9年間「表現」については、研究としては分野にわけあつてきており、子ども対象の研究に重点がおかれてきた。子どもを理解して研究を進めようという気持ちがある研究者が増えていることは教育要領が言うような総合的表現を理解するために、現実の子どもの理解がなければならない。子ども対象の研究センターであることは、総合的表現の理解をめざしているのではないか。ただ、総合的表現をあつかう研究が少なかったことから、今後は、分野別に子どもの表現をとらえた研究成果が比較検討されるなどして、総合的に子ども

の表現をとらえようとする理論研究、それを反映させた実践研究などが望まれる。分野別に研究していても他分野へ関連した部分が必ずあるため、分野別に分けた研究から研究者、保育者は子どもをより理解するために実践研究を続けながら、そこから、表現を総合的に理解していくことが必要であると考える。

<引用文献>

- 1)大場牧夫・高杉自子・森上史朗編著『幼稚園教育要領解説』p135. フレーベル館,1989.
- 2)戒喜久恵「保育実践の立場から思うこと」日本保育学会第50回大会論文集,p48.1997.

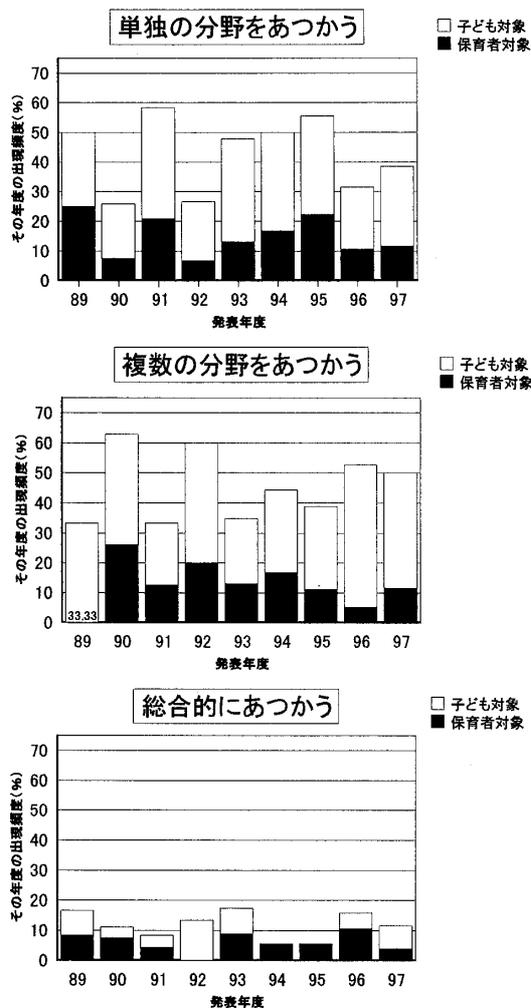


図1. 表現のあつかいかた

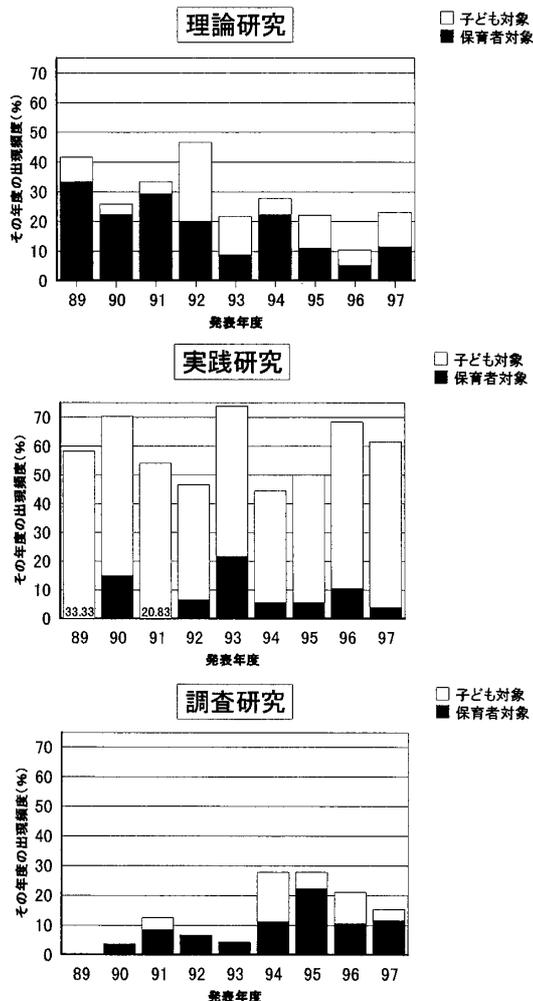


図2. 研究内容